

模擬患者と学生の協働的パートナーシップに基づく ケア演習の試み

著者	犬丸 杏里, 坂口 美和, 出原 弥和, 吉田 和枝, 竹内 佐智恵, 後藤 姉奈, 辻川 真弓
雑誌名	三重看護学誌
巻	16
号	1
ページ	43-45
発行年	2014-03-15
その他のタイトル	A report on a trial practice setting that nursing students take care of simulated patients in collaboration with them
URL	http://hdl.handle.net/10076/13832

模擬患者と学生の協働的パートナーシップに基づくケア演習の試み

犬丸 杏里¹⁾, 坂口 美和¹⁾, 出原 弥和²⁾, 吉田 和枝¹⁾
竹内佐智恵¹⁾, 後藤 姉奈¹⁾, 辻川 真弓¹⁾

**A report on a trial practice setting that nursing students
take care of simulated patients in collaboration with them**

**Anri INUMARU, Miwa SAKAGUCHI, Miwa IZUHARA, Kazue YOSHIDA
Sachie TAKEUCHI, Shina GOTO and Mayumi TSUJIKAWA**

Key Words: simulated patients, nursing students, collaborative partnership approach, practice

はじめに

地域包括ケアの時代を迎え、看護専門職者は今後、ますます多くの人々と協働してケアをしていくことが期待される。また、急性期治療が終われば外来治療、在宅療養への早期切り替えが進む中、患者や家族は、積極的に自己のケアに参加し、病気に伴う様々な課題の自己管理を行わなければならない。患者や家族が自己効力感を高め、自分たちの目標に向かって課題への対処を継続して行ってゆくためにも、看護専門職者と患者や家族は、協働的パートナーシップ (Gottlieb, 2005) の関係を構築することが望まれる。

こうした背景を鑑み、模擬患者 (Simulated Patient 以下, SP) と看護学生 (以下, 学生) の協働的パートナーシップに基づく実践の演習を行った。SPを導入した演習は、従来の学生同士のロールプレイとは異なり、より実際の臨床場面に近い状況を作り出すことが可能である。本稿では、今回行った演習の実践を報告する。

演習の実際

今回の演習は3学年次生77人を対象に90分2コマを使い行った。彼らは2学年次生のときに協働的パートナーシップについて講義を受けている。後期に始まる領域別実習に向けて、認知面だけでなく行動面で

の学びを促すために演習を企画した。

演習目標は、SPとのコミュニケーションを通して、看護学生としての自身の関わりを振り返り、自己の課題に気づくである。演習のはじめには協働的パートナーシップのことは触れていない。学生が実習生としてSPを受け持ち、明日の手術に向けて行わなければならないことをやりに病室に出向くという場面設定の中、学生がどのように関わりをもち、話を進めていくのかが問われる。ロールプレイの後、SPからのフィードバックを元に、どうしたらより良いケアになるのかを学生とSPとで一緒に考える体験も入れている。

演習の流れ

1. 学生は、事前に配布される「受け持ち患者の背景、発病から入院まで状況、入院時の状況、学生が患者に出会う設定場面が書かれた事例」を読み、受け持ち患者の状況を把握する。
2. 学生は、事前に配布される「1日の目標や看護上の問題、1日の流れが記載された」ワークシートを読み、実習の一日の流れを確認する。
3. 学生は、SPとの演習に向けて、設定場面での入室から退室までのプランを個人で別紙にて立てる。
4. プランを作成しながら、追加で必要と考えたもの、例えばパンフレットなどを各自で作成する。
5. 演習当日、小グループに分かれて、設定場面を作

1) 成人・精神看護学講座

2) 医学看護教育センター

り、SPとグループの代表の学生でロールプレイを実施する。

*実施をしない学生は、ロールプレイを見ながら自己のプランに修正を加えたり、SPの表情などを観察したりメモをとる。

6. SPと実施した学生、見学をした学生たちとで振り返りを行い、よりよいケアにするためにはどうしたらよいかを話し合う。
7. 振り返りを踏まえて、1回目とは別の学生が2回目のロールプレイを実施する。
8. 2回目の振り返りを行う。
9. 全SP、全学生が集まり、全体での共有を行う。
10. 教員と学生は協働的パートナーシップの視点から今回の演習を振り返る。
11. 学生はワークシートおよび自己のプランを修正する。
12. 感想を書く。

協働的パートナーシップの視点での演習の振り返りポイント

振り返りでは、1.対象者と看護専門職者との関係は対等であること 2.協働する関係性を作っていくために大切なこと 3.協働して取り組む過程 4.ワークシートから分かること の4点について行った。

1. 対象者と看護専門職者との関係は対等であること
ケアを行う前には、患者の意思確認、同意が必要であることをもう一度ふりかえった。学生の計画通りの時間に計画してきたことをしようとしていなかったか、学生のもつ知識を一方的に伝えようとしていなかったかを問うた。こうした行為は、支配的な専門職と従属的な患者という力関係を生み出し、患者の意思決定能力や自律性を阻害する恐れがあることを確認した。

2. 協働する関係性を作っていくために大切なこと

次の7点について具体的に確認した。

- 1) プライバシーが守られる場所で話し合いや面談をする。
- 2) 患者と一緒に過ごす時間を作る。
患者に関心を示す。相手の考えや思いを伝えることのできる時間を確保する。患者の話を中心して聞く。
- 3) 患者の生活時間を尊重する。
- 4) 患者が感じていることを言葉や態度で理解を示して、感情を重んじる。
- 5) 患者の強みを見つける。強みを伝える。
- 6) いつでも話をしてよいことを伝える。
- 7) 患者が話してくれるのを待っているだけでなく、

患者の気になっていることや症状をこちらからも尋ねる。

3. 協働して取り組む過程

次の4点を確認した。

1) 対象者と協働することの表明：

- ① 担当する学生が自分の名前を伝える。
(受け持ち2日目で忘れていないかもしれない)
- ② 患者と家族が治療を乗り越え、退院し、また元の生活に戻れるように一緒に考え、一緒に取り組んでいきたいことを伝える。
- ③ 患者の考え、見聞きして知っていること、こうしたいという希望を話して欲しいことを伝える。

2) 対象者の意思決定を引き出す：

- ① 患者に説明、ケアを行う前には「～しますね」ではなく、「～してもいいですか」と意思の確認をする。
- ② 意思を伝えてくれたことへの感謝を伝える。

3) 対象者と協力して目標を設定する：

- ① 看護専門職者の目標は、患者の目標と一致しているのかを知る。
- ② 患者がどうしたい、どうなりたいと思っているのかを尋ね、言動、行動からキャッチして、一緒に目標を明確化する。
- ③ 目標の優先順位を付ける。
例えば、まず、手術に対する様々な気持ちを共有して、手術に向かう気持ちの準備ができること、次に、術後の合併症予防のために、呼吸訓練を行うこと。

4) 対象者と協力して評価をする：

- ① 今回の演習では、コミュニケーションの他、この場面でSPにとってよりよいケアとなるにはどうしたらよいかを一緒に考えた。
- ② (協力して目標設定ができれば、目標の達成度合いを一緒に評価する。)

4. ワークシートから分かること

ワークシートには、事前に {実習目標} {注目点・看護問題} {行動計画} を記している。その中で読み取れることを振り返った。

1) ケア時間の見通しを立てることができる

9:00に処置を行う予定にしているが、仮にSPの体調と心理状況によって午後に変更することも可能であり、時間の見通しを立てることが出来ることを確認した。

2) 関係性に配慮する

学生は受け持ち2日目、SPにとっては術前2日という状況に配慮する。

3) ケアは統合されている

事前に渡されているワークシートは、注目点・看護問題に番号をふり、それぞれバラバラに行動計画が書かれている。しかし、実際は、ひとつのことだけを行うのではなく、そのことを行う中で思いを聴いたり、補足説明をして不安を軽減したりと、統合されたケアとして提供される。SPとのやり取りの中で、SPの心理状況を考慮せずに、必要なことを実施しようとする計画は誤りであることを確認する。また、実施前の情報を得ることの重要性も確認した。

実施後の学生の学び

学生たちは、事前に渡される事例の設定状況から、ケア計画を立てて演習に臨む。しかし、計画通りには進まないという体験をする。せっかく作ったパンフレットも見てももらえないという体験をする学生もいる。

こうした苦い体験をすることで、学生の多くは、ケアは相手のためにあるという基本的なことを今一度身をもって学ぶ。

自分の行動が自分本位であったことに気づかされたり、患者とともにケアを考えていくことの大切さを実感したりする。また、一日のケア計画を立てることで、見直しをもって臨機応変にケアが行えることも学んでいた。

まとめ

SPを導入した演習は他学でも行われている。しかし、SPと協働的パートナーシップに基づくケア演習についての報告はなく、今後、演習の効果を分析し、より学びが深まる演習にしていきたいと考えている。

文献

ローリィ N ゴットリーブ, ナンシー フィーリー, シンディー ダルトン(2007): 協働的パートナーシップによるケア—援助関係におけるバランス. エルゼビア・ジャパン, 東京.

キーワード：模擬患者，看護学生，協働的パートナーシップ，演習